

其角の不易流行観

牧 藍子

はじめに

其角の作意を凝らした技巧的な作風は、しばしば芭蕉とは対照的であるととらえられている。そして、そのような両者の作風の違いは、其角が芭蕉のように地方行脚をすることなく、江戸を拠点に活動していたという実際的な要因によるばかりではなく、不易流行という蕉風俳諧の中核理念とも深く関わるものである。本稿では、特に同門内で批判の的ともなる其角晩年の俳風について、其角の不易流行観の特殊性という観点から考察する。

さて、芭蕉門人による其角評の多くは、其角の俳風を作意を好む華やかなものと特徴づけており、其角の俳風が芭蕉のそれとは異質なものとして認識されていたことをうか

がわせる。そして、そうした其角の俳風は、天賦の才によるものとして肯定されつつも、一方では技巧を凝らし作意を重ねた難解な句を好むことに関しては、批判的な意見も多くなされている¹⁾。しかし、其角の「角文字や」の句をめぐる一連の支考の評が、時を追うにしたがって否定的なものとなっていくさまには、同門内における其角批判が、単なる其角の作風のみの問題ではないことが確認できる。それは、蕉門の俳諧観の変遷と密接に関わるのである。そこで一貫して取り上げられている「角文字やいせの野がひの花薄」の句は、「こい(ひ)しく」という語を詠み込んだ「ふたつ文字牛の角文字直ぐな文字歪み文字とぞ君は覚ゆる」という『徒然草』第六十二段の和歌をふまえつつ、「角文字や」の五文字を「い」の字を導く枕詞のように用いた

新しさ、「牛」の「ぬけ」、「花薄」の「花」と「牛の鼻」の掛詞等の技巧の鮮やかさに眼目のある句である。

まずはじめに引用する支考の『葛の松原』の文章は、芭蕉の「梅若菜鞠子の宿のとろ、汁」の句について「むかしより文章には結前生後の詞といへる事は、今の若菜のはたらく物ならむか」と述べるのに続けて、「角文字や」の句について言及した部分である。

角文字やいせの野がひの花薄 其角

阿叟ははじめて結前生後の詞を用ひ、晋子ははじめ
ていの字の風流を尽す。古今俳諧のまくらならむと、
よき人も申され侍しよし。

(支考『葛の松原』元禄五年(一六九二)刊、同年五月十五日
自輿^②)

「結前生後」とは、漢詩文などで前をまとめ後を起こす意で、
具体的には「梅若菜」の句の中の「若菜」の語が、「梅」の
語と「とろ、汁」を結ぶにあたって、植物・食物の両用に
働くことを指す。ここで支考は、「若菜」の語と同様の巧み
さを「角文字や」の表現に認め、その新しさを評価してい
るのである。しかし、こうした肯定的な評価は、次第に厳
しいものへと変わる。次の『東華集』では、「角文字や」の
句を「枕詞に似たる体」の例句として掲げている。

枕詞に似たる体

あらかねの蕪めされて若菜かな

角文字やいせの野飼の花薄

晋子が花薄は古今の俳諧の枕ならむといへりけるが、
是たゞいひかけといふべし。

(支考『東華集』元禄十三年(一七〇〇)九月刊^③)
このように支考の評価は厳しく、「角文字や」における枕詞
的な手法を、言語遊戯的な旧風の「いいかけ」の手法と同
じであるとみなして批判している。最後に挙げる『東西夜話』
では、「角文字や」の句に代表されるような其角の俳風全般
に対して否定的な評価を下している。「角文字や」の句と並
べて掲げられる「山雀の」の句は「山陵カウの壺歩をまはす師
走哉」を指し、『いつを昔』では「山がらのまはすくるみの
とにかくにもてあつかふは心なりけり」(夫木和歌抄・雑部九・
動物部・二二八八三・光俊朝臣^④)をふまえていることを示す前
書が付される。この句はまた、持てあますという意の諺「山
雀の胡桃を回す」をふまえ、「山陵」の音読みに通じる金額
を表す「三両」と、その借金の利子である「一分」という
意を掛詞として効かせており、同時に挙げられた「角文字や」
の句も、同じく技巧的で難解な作風の句として否定的にみ
られていたといえる^⑤。

晋子がはいかいは、をのが心の作をこのめり。翁の生前には、百句の中二三句ほどは作に作をかさねたれど、世の人も耳めづらしく、晋子は作者なりといへり。さるは、角文字のいせといひ、山雀の老歩といふたぐひなり。先師滅後はその作にますく長じて、あるいは二作三作におよぶ。たとへば九重の堤にのほりて、あとの階子をはづしたることく見る人其行筋をしらず。

(支考『東西夜話』元禄十五年(一七〇二)刊)⁶

支考も『東西夜話』の別の箇所で言及しているが、實際晩年に近づくにつれ、其角の句は難解な傾向を強めたと考えられる⁷。しかし、こうした「角文字や」の句をめぐる支考の評の変化は、芭蕉の俳風が「軽み」に移っていったことを背景に、其角の作意を凝らした技巧的な俳風が相対的に際立ち、批判の対象ともなっていたことを示すものといえる。

1 「贈其角先生書」と蕉門の不易流行観

こうした其角の俳風を、不易流行の観点から「流行」に遅れているとして反省を促したのが其角宛去来書簡、「贈其角先生書」である。しかし、この文章の検討に移る前に、まずは去来の不易流行の理解をはじめ、芭蕉門人の不易流

行のとらえ方を簡単に確認しておきたい。

まず、蕉風の不易流行を説明する際にしばしば引用される、土芳の『三冊子』の説くところをみてみたい。

師の風雅に万代不易有。一時の変化あり。この二つに究り、其本一也。その一といふは風雅の誠也。(中略) 変化にうつらざれば、風あらたまらず。是に推移らずと云は、一端の流行に口質時を得たる斗にて、その誠をせめざる故也。せめず心をこらざるもの、誠の變化を知ると斗云事なし。唯人にあやかりて行のみ也。せむるものはその地に足をすへがたく、一步自然に進む理也。

(土芳『三冊子』元禄十五年(一七〇二)成)

これは去来が「贈其角先生書」の中で不易流行の説に言及した次の文章と非常に類似しており、一見すると両者は同じような不易流行の理解の仕方をしていたように見受けられる。

句に千歳不易のすがた有、一時流行のすがた有、此を両端におしへ給えども、その本一なり。一なるは共に風雅の誠をとればなり。不易の句を知ざれば本立がた、流行の句を学びざれば風あらたならず。

(風国『菊の香』元禄十年(一六九七)九月刊)⁸

しかし、一方で去来が不易流行を「不易」と「流行」の二

元論としてとらえていることは、例えば次に引用する『俳諧問答』の文章からも明らかである。⁹⁾

不易・流行を分て案ずる事、故ありていふなるべしといふは、或奉納・賀・追悼・賢人義士の類の賛のごときは、必ず不易を以て句案するを要とす。又着題・風吟、或は他門の人に対して、当流をほめめかし、或は新風にをしようつらんとけいこのごとき、皆流行の句を以て專に案ず。

(去来・許六『俳諧問答』元禄十年(一六九七)十二月去来奥、同十一年(一六九八)十一月三日許六奥)

このような去来の二元論的な不易流行観は、「不易」を知り、誠をせめれば自ずと「流行」するとうように、「不易」と「流行」を連続したものととらえる土芳の不易流行観とは異なる。これは不易流行の説に基づいた「贈其角先生書」の其角批判を考える際にも当然考慮に入れなければならない問題であるが、この去来書簡における批判は、あくまでも其角が同じ風にとどまり続ける点にあるので、これを去来の特異な不易流行観に基づく批判とまで限定する必要はないことを確認しておく。

2 『末若葉』跋文の其角加筆の問題

さて、去来の「贈其角先生書」に対して、其角は特に反論の姿勢を見せないものであるが、かわりに同年去来の書簡をとどころどころ改めて『末若葉』の跋に用いた。この経緯は、去来の書簡の正文と『末若葉』跋文を並べて掲載した風国の『菊の香』、また「贈其角先生書」を契機としてなされた去来と許六の間答からなる『俳諧問答』によつて確認できる。

『末若葉』跋文における其角の加筆は、基本的には文章を簡潔にし其角を賞賛する調子を強めるといった、跋の体裁を整えるのに必要な処置とみなしうるものである。具体的な改変箇所をいくつか見ていくと、まず冒頭部では、去来書簡では芭蕉を指していた「師」の呼称を、其角自身を指すよう文脈を操作することにより、芭蕉の行跡を記した箇所を、其角の行跡を語るものへと巧みに転じている。

故翁奥羽の行脚より都へ越給ひける比、当門の誹諧已に一変す。我が輩、笈を幻住菴に荷ひ、棒を落柿舎に受て、略そのおもむきを得たり。『ひさご』・『さるみの』是也。其後又一つの新風を起さる。『炭俵』・『続猿』是也。去来問曰、「師の風雅見及処、『次韻』にあらたまり、『みなしぐり』にうつりてよりこのかた、しばく変じ

て門人その流行に浴せん事をおもへり。我是を聞けり。句に千歳不易のすがた有、一時流行のすがた有、此を両端におしへ給えども、その本一なり。(贈其角先生書) 去来問、「師の風雅、見及ぶところ、『みなし栗』よりこのかたしばく変じて、門人、其流に浴せんことを願へり。我是を古翁に聞り。句に千歳不易、一時流行の両端あり。(其角『末若葉』元禄十年(一六九七)夏目序) 其角の文章では、『虚栗』以前に関する記述を削り、「我是を古翁に聞り」と改めて言い直すことによつて、「師」が其角自身を指すように読めるようになってゐる。また他に、「角や今我が今日の流行におくる、とも、行末又そこばくの風流を吐出し来らんもしるべからず。」とあつたのを、「晋、今わがならはしを得ずといふとも、行末そこばくの風流を吐出さんこと鏡影たり。」と書き換えるなど、其角を積極的に肯定するニュアンスを強めている箇所も見受けられる。『末若葉』跋文の改変の多くは、このように文章を簡潔にしたり、其角を賞賛する調子を強めるといった、跋の体裁を整えるための処置ともみなせるものだが、ここで内容的な改変として目を引くのが、去来が不易流行の理念を説いた部分についての其角の加筆箇所である。既に山下一海氏によつて指摘されるように、これらの箇所には敢えて「流行」

に議論が及ぶことを避けようとする其角の意図が表れてゐると考えられるのである。以下、山下氏の論考と重複する部分も多いが、「流行」と関わる「贈其角先生書」の文章と、その箇所に対応する『末若葉』跋の文章を順に掲げる。

まず、冒頭に近い部分であるが、「流行」に関する説明が大幅に省略されている。

句に千歳不易のすがた有、一時流行のすがた有、此を両端におしへ給えども、その本一なり。一なるは共に風雅の誠をとればなり。不易の句を知ざれば本立がたく、流行の句を学びざれば風あらたならず。能不易をしる人は、往としておしうつらずといふ事なし。たまぐ一時の流行に秀たるものは、たゞ己が口質の時に逢のみにて、他日流行の場にいたりて、一歩もあゆむ事あたはずと。(贈其角先生書)

句に千歳不易、一時流行の両端あり。不易をしる人は、流行にうつらずといふ事なし。一時に秀たるものは、口質の時にあへるのみにて、他日の流行にいたりては、一歩もあゆむ事あたはず。(『末若葉』跋)

同じく、去来が其角の俳風が「流行」に遅れているということを難じた箇所では、以下の通り「流行」に関する部分が削られ、芭蕉の俳風と異なる俳風であるという点に言及

するのみになっている。

不易の句においては、頗る寄妙(マヤ)を振へり。流行の句にいたりては、近来その赴を失へり。殊ニ角子は世上の宗匠、蕉門の高弟なり。却而吟跡の師とひとしからざる事、諸生の迷ひ、同門の恨少からず。(贈其角先生書)翁の吟跡にひとしからざること、諸生のまよひ、同門の恨少からず。

(『末若葉』跋)

次に引用する箇所は、去来へ返答した芭蕉の言葉であるが、やはり『末若葉』跋では「流行」という語が避けられている。

凡天下に師たるものは、先己が形位を定めざれば、人おもむく処なし。是角が旧姿をあらためざる故にして、予が流行に誘ざる所なり。我が老吟に友なへる人がくは、雲けぶりの風に変ずるが如く、朝々暮々かしこにあらはれ、此に跡なからん事をたのしめる狂客なり。共に風雅の誠をしらば、暫く流行のおなじからざるも又相はげむの便なるべし。

(『贈其角先生書』)

凡天下に師たるものは、先己れが形位を定めざれば、人趣くに所なし。晋が句体の予と等からざる故にして、人をす、ましめたり。又、我老吟を甘なふ人々は、雲・煙の風に変じて跡なからん事を悦べる狂客なり。ともいに風雅の神をしらば、晋が風興をとる事可也。

(『末若葉』跋)

このように、其角の『末若葉』跋文は、基本的には「贈其角先生書」の文章をそのまま活かして簡略にしたものであるが、「流行」に関する箇所については、「流行」に話が及ぶことを避ける意図が働いているのである。

3 其角の不易流行観

其角が「流行」の議論を避ける背景には、芭蕉の「流行」の風が、其角自身の俳風とは異なる「軽み」の風であったことが当然考えられる。しかし、『旅寝論』の中で、去来が「其角は蕉門の高弟也。不易・流行の説定て学びつらん。しかれ共彼一己の好む所にとゞまりて、長ク先師の変風にしたがはず。却而同門の人々にいやしめらるゝ」と述べるように、芭蕉の高弟である其角が不易流行の教えを耳にしなかつたとは考えにくい。やはり、先に確認したような「流行」に特別こだわる其角の態度には、其角が不易流行について独自の見解を持っていたことを想像させよう。そこで、次にそうした其角の不易流行観の一端が表れている『雑談集』の一節を考察する。

俳諧に新古のさかい分がたし。いはゞ情シヤウのうすき句は、をのづから見あきもし、聞ふるさるゝにや。又、情の

厚^{コウ}き句は、詞も心も古けれども、作者の誠より思ひ合ぬるゆへ、時に新しく、不易^{エキ}の功あらはれ侍る。

(其角『雑談集』元禄四年(二六九二)成)

「不易」の句は、時の流れの中にあつて常に新しみを失わないうという其角の不易流行観は、「不易」と「流行」を一体にとらえるという意味では、土芳の不易流行観に連なるものといえるが、「流行」という語が用いられていないことからうかがわれる通り、「不易」中心で「流行」の意識が薄い点が特徴的である。「新古のさかい分がたし」というのも、『三冊子』の文中で「不易といふは、新古によらず、変化流行にもか、わらず、誠によく立たる姿也。代々の哥人の哥を見るに、代々その変化あり。又、新古にもわたらず、今見る所むかし見しにかはらず、あはれなる哥多し。」と、「不易」の重要性を説く際に用いられている言葉である。

こうした「不易」に重点をおく其角の不易流行観を理解するためには、其角が「不易」をどのようにとらえていたかをさぐる必要がある。そこで『雑談集』全体を見渡してみると、本書には、時代が移り変わっても不朽の価値を持ち続ける句を讃える文章が多く見つかる。次の文章もそのうちの一つである。

其昔風といへる時の、正章・重頼・立圃・宗因、一句

とてもあだなる句はなし。時代蒔^{マキ}絵^エの堅地にて、尤秘藏せらる。又、昔とて下地籠^{ソサウ}相^{サウ}に、念の入ざるは元やすく破^ワやすし。今何の用にた、ず。当時の作者、此心を得て、随分念を入れて工案^{コウアン}せよ。千歳の後も至宝^{シホウ}也。

正章以下の四人は、いずれも貞門・談林時代の俳人で、彼らの句は当然古い時代に詠まれた旧風の作とみなされるが、其角はこれらの作者の句を、時流が変わってもそのよさを失わない優れたものと評価している。つまり其角において「不易」は普遍的価値故に時の変化に堪えうるというように、固定的なものとしてとらえられており、そこに時に合わせて「流行」するといった動的な側面に積極的な価値が認められているわけではない。其角の不易流行観は、敢えて「流行」という語を用いれば「不易」即「流行」といえるようだが、その場合の「流行」は、不易の価値を持つ句が、時代にも受け入れられ十分に通用する状態をいうのであり、蕉門一般でいうところの「流行」とはやや異なる意味合いを持つものといえる。⁽¹⁾

4 其角の「不易」の根拠

では、其角は不易性の根拠を何においているのであろうか。結論から言えば、先に引用した『雑談集』の文章に「詞

も心も古けれども、作者の誠より思ひ合ぬるゆへ、時に新しく、不易エキの功あらはれ侍る。」とある通り、其角はそれを「作者の誠」におく。次にこの「作者の誠」について、しばらく考えてみたい。

『雑談集』には、ある人物の句と、それに因んだ逸話を組み合わせて語る文章が多く見られる。例えば「白炭ややかぬ昔の雪の枝」（『佐夜中山集』）の句で知られ、芭蕉も「先徳多が中にも、宗鑑あり、宗因あり、白炭の忠知あり」（『初蟬』）と慕っている忠知が、零落してついに切腹するに至って詠んだ辞世の句について、其角は次のように語る。

家を売たるふち瀬にとは、盛衰セイスイの至誠シジヤウをよまれたり。
負物オヒいたく成ぬれば、風雅也とても人ゆるさず。されば白炭と聞えし忠知が、

霜月やあるはなき身の影法師

と辞世して腹切ける。いかにせまりたる浮世には成けん、哀也。かの沾木をさへ、忠知が子也といへば、人も憐アハレみ見かはしけり。五十年來の誹諧の正風をしれるもの独也。

冒頭の「家を売りたるふち瀬に」という箇所は、「家をうりてよめる」という詞書が付された「あすかがはふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆく物にぞ有りける」（古今和歌

集・雑歌・九九〇・伊勢）の歌をふまえている。伊勢の歌は、無常という古今を通じて普遍的テーマを詠んだもので、「霜月や」の句にもそれと通じる不易性が備わる故に、忠知の名が今なお語り継がれているというのであるが、其角がそれを、忠知が身をもつて世の盛衰を味わった人物であることに関連づけて語る点が注目される。つまり忠知の句の普遍性は、そうした忠知の人物像によって裏付けられているのである。¹²⁾

こうした作者の尊重は、作者の境遇とその作品を結びつけて語る語り口ばかりではなく、其角の等類をめぐる見解にも形を変えて表れている。次に引用する『旅寝論』の文章は、凡兆の「桐の木」の句について等類を議論したものである。なお、この句をめぐる逸話は『去來抄』にも載るが、其角の等類判定は、去來と比べてもかなり厳しいものとなっている。¹³⁾

桐の木の風にかまはぬ落葉かな 凡兆

此句、先師の

檜の木の花にかまはぬすがたかな

と云発句と等類なりと、其角と凡兆と諍論有。其角が曰、「師の檜木発句、多く風景を見つくしたる魂よりねり出したる一句也。吾等ワレラが桐の木は、漸シヅカくかしの木にとり

つき、指頭にひろい集たるなり。かくのごとく名人の句をおかし来らんは、情なき作者といつ、べし」。

凡兆の句は、風もないのに葉を落とす桐の木の様子を詠んでいるのに対し、芭蕉の句は、春の花が咲き競う中で、それらにかまわず超然と立っている檜の木のをさまを詠んだものである。よって凡兆の句は、表現や発想において芭蕉句と似通うところはあっても、句意は異なるため、等類を逃れているとの見方も可能である。其角はそれを、芭蕉の「檜の木」の句が、「魂よりねり出したる」句であるのに対し、凡兆の「桐の木」の句は、小手先のものであるという理由で等類とみなすのである。同様の意見はまた、『旅寝論』の別の箇所にもうかがわれる。

其角一日語テ曰、「今同門の輩、先師の変風をしたふものを見れば、

梅が香にのつと日の出る山路哉 先師

と吟じ給へば、或は「すつと」「きつと」、などいへり。

師の「のつと」は誠ののつとにて、一句の主也。門人の「きつと」「すつと」は、きつとも、すつ共せず、尤見ぐるし、。晋子是を学ぶ事なし」。

其角は、芭蕉の「のつと」を「誠」の表現とし、芭蕉門人の「すつと」「きつと」という類似表現は、その表層を真似

たものにすぎないとする。以上二つの『旅寝論』の例では、一句の意味内容ではなく、「花にかまわぬ」や「のつと」という具体的な表現に焦点が当てられているため、先に挙げた忠知の句の場合のように、作者の境遇といった具体的なものを反映しているのとは異なるが、やはり表現面も含めた広い意味で、その作者ならではの句を評価する其角の姿勢が表れている。

このように、其角の考える「作者の誠より思ひ合ぬる」句とは、いわばその作者ならではの句ということであり、そこに不易の価値が見いだされる。そうした観点からすると、次に引用する『雑談集』の文章において、其角が「うき世のはて」の句の「さび」を、芭蕉らしさが表れている故に重要視していることが注目されてくる。このような見方は、蕉門において「さび」という性質そのものに特別な意味が認められていることを考え合わせると、非常に興味深いものである。

去比、「品かはる恋」といふ句に、

百夜が中に雪の少将

と云句を付て、「忍の字の心をふかく取たるよ」と自讃申けるに、『猿蓑』の哥仙に、「品かはりたる恋をして」といふ句に、

うき世のはては皆小町也

と、翁の句聞えければ、此句の鈿やう、作の外をはなれて、日々の変シにかけ、時の間の人情にうつりて、しかも翁の衰病スエイヤウにつかはれし境界にかなへる所、誠をろそかならず。少将と云る句は、予が血気に合ぬれば、句のふりもさかしく聞え侍るにや。此口癖グセ、いかに愈イユしぬべき。

芭蕉句に表れた「鈿やう」は、日々変化する世の中であつて、そのままの形で人々の共感を得るとされるが、そうした評価には、芭蕉の「衰病スエイヤウにつかはれし境界」に基づいた、芭蕉ならではの句であることが前提となつている。それに対して其角の「雪の少将」の句は、やはり其角らしく血気さかんなさまが表れているので、其角は芭蕉の「さび」をうらやましく思いながらも、才の質の違いとして納得しているのである。

5 其角の新しみの追求

これまで確認してきた通り、其角は作者の境遇や性質と深く関わる「作者の誠」を重視し、その不易流行観は「作者の誠」によって裏付けられる不易性に重点のあるものであつた。また其角の「不易」は普遍的な価値を有する故、

そのままの形でいつの時代にも通用するというものであり、変風としての「流行」に新しみを見いだそうとするものとはいえない。そして、このような不易流行観は、其角がしばしば俳諧のよしあしを、一句一句の作品で用いられている具体的な表現に焦点を当てて判断していることも深く関係している⁽¹⁶⁾。例えば、其角晩年の『類柑子』に「俳諧はことさら一句一体のものにこそ」という言葉があるが、この「一体」は、「発句・付句ともに、句の主に成事得がたき也。万歳扇に名をはるやうにて、作者の名、句ことにあれども、一体を立ざれば、其名しかと定がたし。只持扇のやうに、名を張付ずして、慥成句の主といはれん様に心得べし。」(『雑談集』)という文章等から、一句が作者のオリジナリティを備えている状態を指すと解釈できる。つまり其角は、作者のオリジナリティが備わっているか否かを基準に、一句一句の作品単位で俳諧のよしあしを判断していたと考えられるのである。また、次に引用する『句兄弟』においても、赤右衛門妻の「啼にさへ笑はゞいかにはと、ぎす」という句を、作者ならではの句として評価している。ここで引き合いに出された「をのがね」は「おのがねにつらきわかればありとだに思ひもしらでとりやなくらむ」(新勅撰和歌集・恋歌三七九四・中宮少将)の歌を、「待宵」は「まつよひのふ

け行くかねのこゑきけばあかぬわかれの鳥はものかは」（新古今和歌集・恋歌三・二一九一・小侍従）の歌を指し、各々の歌の作者はこれらの歌の評判によって「己が音の少将」「待宵の小侍従」の異名で呼ばれている。

兄 赤右衛門妻

啼にさへ笑はゞいかにほと、ぎす

弟

さもこそは木兎笑へほと、ぎす

人情を仮て笑へといへる作意、女の質なり。此句は、をのがね・待宵の名高き程にひゞきて、人口にあるゆへ、さらに類作の聞えもなく、一人一句にとゞまり待るは、うらやましく覚ながら、心のとゞきかねしに（後略）

（其角『句兄弟』元禄七年（二六九四）八月五日自序）

右の文章からわかる通り、其角は「おのがね」「待宵」といった、他の人が用いることのはばかられるような、その作者限りの表現を尊重し、そうした表現を持つ作品を「一人一句」として理想としたのである。作者独自の表現は、作者の名とともに人々の心に長く記憶され、「不易」の価値を持ち続けるという考えのもと、其角は「一句一体」「一人一句」と賞される句を常に生みだしていくことに、自らの俳諧を追求していったのである。

以上のように、一句のよしあしに重点をおき、中でも作者独自の表現に特別な価値を認める其角の考えは、風としての新しみの追求に無頓着な態度につながるものではあるが、必ずしも俳諧の新しみ自体に無頓着であることを意味するものではない。確かに其角には、以下に引用する『末若葉』序文のように、「作者哉」と評されるような句を詠むことを第一とし、一見新古それ自体をあまり問題にしないような発言もみられる。

句は張良が胸中の兵の如し。日夜にわき出るものなれば、一句くの新古は見ん人も思ひゆるさるべし。さしあひ・輪廻ま、あり。それも其一句の死活を考へ合て、見ゆるし有べし。（中略）さし合くりと云れんより、作者哉といはれまほし。

しかし、それは旧風の句の中で用いられた表現であつても、表現として優れていれば積極的に評価し、そこにある種の新しみを見いだそうとする姿勢につながっていると考えられる。次に挙げる『句兄弟』の文章は、そのように其角が旧風の句の表現に新しみを見いだそうとしていたことを示す例である。立圃の句の中の、「一つたも」と「袂」を結びつける「いいかけ」の手法は、貞門・談林時代によく用いられた修辞技法だが、其角はそれを古くさいとして退ける

ことなく、弟句でそのまま用いている。

兄 立圃

花ひとつたもとにすがる童かな

弟

花ひとつ袂に御乳の手出し哉

至愛の心より作者の功をあらはし、「一つたも」といふ詞のやすらかなる所、又なき妙句なれば、都鄙にわたりて句意曇なし。されば、当時云かけの発句を珍賞せずして、いたづらに古版の書に埋もれ侍るを、予歎美して、古人の深察を再「転せり。(中略)「同ッ惜少年」春」、千載不易の句を手本にして転換すれば、評品つまびらか也。

其角は、「花ひとつたも」という表現を優れたものとみなし、そこにある種の新しみの可能性を認めたからこそ、弟句の中に再生させたといえる。また同じような姿勢は、謡曲調をめぐっても確認される。謡曲調は、談林時代に流行した詠風であるが、其角はそれを特に創始者と目される宗因の作品において「其実を捨ざる所、肌骨に入」と認め、その上で自句の中に摂取している。

「諷は俳諧の『源氏』なり」と、これを一向の格意として、凡百番のうちにて、目にたつ詞、耳近き雲に起ふ

す頭巾もあり、かやうに言を工みにし、自句・他句のわかまへもなくものせしかば、いつその程に自他ともにめづらしからず所為で、十とせあまり此かた、誰となくいひやみけると、風体のうつりかはるにまかせて、只おほかたに思ひくられる折ふし、江口の里にて、

やどれとは御身いか成人時雨 梅翁

と云句を承りて、其実を捨ざる所、肌骨に入て侍れども、ふたゝび取附べき詞もなかつし所に、大津にて、

雪の日や船頭どのの顔の色 其角

と申ける次の年の春、

花の陰うたひに似たる旅寝哉 芭蕉

と聞えけり。然らば章なくと俳諧の諷はれぬべきこととを、と思立て(後略)

(『雑談集』)

其角の「雪の日や」における謡曲の利用は、ほとんど談林時代の用法そのままといつてよいが、一句における謡曲の詞章の利用が表現として優れているために試みられたのであり、謡曲調という過去の風に固執しない態度がうかがわれる。一方で其角はまた、同じく謡曲をふまえながらも詞章をそのまま用いていない芭蕉の「花の陰」の句に、表現としての新しさを認めている。詞章を直接取らない芭蕉の句はすつきりとした印象で、同じく謡曲をふまえていても、

宗因流の謡曲調は微塵も感じられない。其角はそこに一句の表現としての新しさを認めたわけであるが、このように作品単位における新しさの追求が、風としての新しさの追求と軌を一にするということもまた当然ありうるのである。

しかし、作者のオリジナリテイが認められるか否かという観点から、句ごとによしあしを判断する其角の態度は、一方で風を変えずに一句毎の表現において目先を変えていくというマイナス面も持ち合わせ、やがては次のような批判を招くようになる。

晋氏^(ママ)其角、器極めてよし。とりはやす事も、表に上手をあらはせしゆへに、諸人に奥をみすかされたり。己が一筋はかたのごとく得たりといへ共、外の道筋をしらざるゆへ、かたのごとくせまし。たとへば堀ぬきの井を見るがごとし。水脈まで堀付たりといへ共、五湖の広きをしらざるに似たり。

〔俳諧問答〕

其角の才能を認めながらも、自己の得意とする風になずんで他を開拓しようとしないうとする許六の評は、「流行」の風におし移らないとして其角を批判した、去来の「贈其角先生書」における批判にそのまま通じている。

其角の不易流行観は、いわゆる「流行」の意識が薄く「不易」に重点がおかれ、その不易性に直接不朽の価値が認め

られているという点で特殊なものであった。そして、このような不易流行観は、其角がその不易性の根本を「作者の誠」におき、不易流行を「作者の誠」の観点から理解していたことと密接に関わり、作者ならではの表現を含んだ個々の句の中に新しみを追求する態度へとつながっている。其角が「軽み」の流れにある蕉門において自己の風を貫き続けたのも、こうした不易流行観を持っていたからなのである。

〔注〕

(1) このような其角の句についての批判は、たとえば次のような考えに基づいてなされていよう。

巧者に病あり。師の詞にも「俳諧は三尺の童にさせよ。初心の句こそたのもしけれ」など、たび／＼云ひ出られしも、皆功者の病を示されし也。(『三冊子』)

(2) 『古典俳文学大系10 蕉門俳論俳文集』(集英社、昭和四十五年九月)。以下、特に注記のないものに関しては、引用は『古典俳文学大系』所収の本文により、濁点・句読点等は私に付した。

(3) 『俳諧文庫第八編 支考全集』(博文館、明治三十一年八月)

(4) 引用和歌の番号は、全て『新編国歌大観』によった。

(5) これら一連の支考による其角評の解釈にあたっては、楠元六男「其角流の消長」(『江戸文学』26号、平成十四年九月)を参考にした。

(6) 引用は富山県立図書館中島文庫蔵本『東西夜話』(国文学研究資料館所蔵の紙焼写真)による。

(7) 先の『東西夜話』の引用箇所の前には、「武の其角の俳諧は、この比の焦尾琴・三上吟を見るに、おほくは唐人の寝言にして、世の人のしるべき句は十句の中一二句には過ぎ。彼はいかに心得たるにかあらん。」という文章がみられる。

(8) この去来書簡は現存不明なため、引用は『菊の香』所収の文章による。後に言及する通り『菊の香』では、其角の加筆を暴露する形で、本来の去来書簡である「贈其角先生書」と、其角がそれに手を加えて『末若葉』の跋として用いた文章とが並べて掲げられている。

(9) 去来は『去来抄』においても、「流行の句」「不易の句」を分けて例示しており、「不易」と「流行」を別個にとらえている。

(10) もともとの去来書簡である「贈其角先生書」と、其角が『末若葉』に跋として載せた「贈晋涉川先生書」とを比較検討した先行研究に、山下一海氏の「不易流行」論争の発端―去来「贈其角先生書」に対する其角加筆―(『国文学』8巻5号、昭和三十八年四月)と「芭蕉俳論の展開」(『芭蕉の本7 風

雅のまこと』(角川書店、昭和四十五年九月)がある。山下氏は前者で『末若葉』跋文における其角加筆を「①文の簡潔②文の技巧③根本的芸術心境を強調しないこと④俳諧の「流行」を強調しないこと⑤其角自賛の語気」の五点に分けて論じ、後者でそれを発展させている。

(11) 元禄四年(一六九一)五月に書かれた『猿蓑』の其角序にある「久しく世にとゞまり、長く人にうつりて、不変の変をしらしむ」について、白石悌三氏は「○不変の変 不変の価値をもつものが時の変化に最もよく堪えるという逆説。」(『新日本古典文学大系70 芭蕉七部集』(岩波書店、平成二年三月)という注を付している。

(12) この忠知の逸話は、風雅の精神を強調する点に主眼があるようにも読めるが、次のような短い章段が『雑談集』に挿入されていることを考え合わせると、詠み手の境遇というものに其角が強い関心を寄せていたことは明らかである。

荷兮集「あら野」に「辞世」とあり。

散花を南無阿弥陀仏と夕べ哉 守武

彼集のあやまりか。神職シノウキの辞世として、何ぞ此境をにらむべきや。只嗚呼アハと歎美カンビしてうちおどろきたる落花か。

鏡を形見といへる重高の哥にや。装束つくるるひて、鏡の間にむかへるに、

親に似ぬ姿ながらもこてふ哉 宝生 沾蓬

最初の例は、神職であつた守武の辞世に仏の名が詠まれていることに疑問を呈したもので、二つめの例は、いかにも能役者らしい句を詠んだ作者沾蓬の名の上に、敢えて「宝生」と能の流派名を注記したものである。沾蓬は未詳の人物であるが、前書きに出てくる重高が、宝生流の能楽師として知られる俳人沾圃の父であり、また沾蓬自身『露沾俳諧集』に多く句が入集していることなどから判断して、同じく露沾周辺の宝生流能楽師であつたと考えられる。なお『雑談集』には、「黒塚の誠こもれり雪女」という発句で始まる其角と沾蓬の両吟歌仙が、謡曲「黒塚」で用いられる鬼女の面の話の後に収められている。

(13) 『去来抄』で、去来は凡兆の句を等類ではなく同巢の句と判定している。

桐の木の風にかまはぬ落葉かな 凡兆

其角曰、「是、先師の檜木の等類也」。凡兆曰、「しからず。詞つゞきの似たるのみにて、意かはれり」。去来曰、「等類とは謂がたし。同巢の句也。同巢を以て作せば、予今日の吟、「風の地にもおとさぬ時雨哉」と云巢をかりて、「滝川の底へふりぬく叢哉」ト言下にいふべし。いさ、か作者手柄なし。されど兄より生れ勝たらんは、又各別也」。

(14) 「檜の木の」は『野ざらし紀行』では三井秋風の閑雅な生活ぶりを喩えた挨拶句として詠まれた句だが、ここではその文脈と切り離して解釈する。

(15) これは元禄八年（一六九五）一月執筆の許六宛去来書簡に載り、泥足経由で去来に伝わった話であることがわかる。

其角は、翁の「梅が香にのつと日の出る」ときこえしより、深川伺公の門人、「すつと」、「くはつと」など、さまざま古翁の辞を似せ候。古翁の「のつと」は、古翁の言葉ぬしにてよろしく候。其外の似せものめら、何之分もなく、「そつと」、「ちつと」など申候とて、しかり候よし、兼而長崎之泥足はなし申候（後略）

(16) 乾裕幸氏は「『いつを昔』の成立」（『俳文芸の研究 井本農一博士古稀記念』（角川書店、昭和五十八年三月））において、「いつを昔」（元禄三年（一六九〇）刊）の跋文中の「其角云、今、予が俳番匠は、其道といひ風体といふ沙汰にあらず。一句は詞を以て作りたつるに、其同じ詞のあらぬ姿にかはる所、これ番匠たるもの、器量のいたす所にあらずや。」という箇所について、「俳道だの風体だのは問題ではない、俳諧の善悪は純粹に技巧の問題なのだ、といっているように聞こえる。こうした俳諧観の下では、新・古の沙汰は不問に付され、俳諧の歴史は空転する。」という見方を示す。

(17) 「誹諧はことさら一句一体のものにこそ」という言葉は、「いろはをも」の正春句が、愚かさにおいては実は人も猿も大差ないのでという類型的な発想によりかかっただけの、一句として作者のオリジナリテイに欠ける句であると批判する文脈で用いられている。なお、引用は東京大学総合図書館酒竹文庫蔵本（酒四〇五七）による。

「此ころ世に張_ル事の候ひて日本橋をわたり候に、猿曳の人にまとはれてむつかしげなるを見侍りしに、

かしこさののが心にながれて

うきをましろのねをのみぞなく

となん申て過候也。」といへるに、正春にがめる顔にて、

「かしらいたや。賢き人のいかで世の中にながれてう

きめ見んや。癡・猿把_ル 月とこそたとへたり。人は己れ

が愚にながれ侍るものぞ。」とあざんかれしに、維足

一言なく、顔に汗して恥入覚えたり。「いかゞ御なをし

をかうむらん。」といふに、

「愚さののがこゝろにながれて

といひたらば歌なるべし。猿智慧猿かしこしなどいふは

俗言也。」とて、

いろはをもかゝぬや我と山の猿 正春

此当座は歌の了簡にも似ず、口惜き姿也。さしも風変の

新古はわかたれずや。誹諧はことさら一句一体のものに

こそ。（其角稿『類柑子』宝永四年（一七〇七）冬編者跋）

(18) この句は『阿羅野』『いつを昔』に収められ、『宝井其角全集』

では、元禄元年（二六八八）十一月二十七日大津の尚白亭で

詠まれた三物の一という。

※本稿は、第一二二回日本近世文学学会大会（平成十九年六月九日・

十日、於青山学院大学）での口頭発表に基づく。席上、ご意見

ご批評を多く頂きました。記して感謝申し上げます。